

地球を結ぶ SEIKYO SHIMBUN

ただいま司会の方からご紹介いただきました清水武でございます。
1時間ほど前に東京から松本駅につきました。

やっぱり信州はいいですねえ。山紫水明の松本平。周囲を取りかこむアルプスの山々。なによりも、人と人のつながりの薄い東京に比べて、こちらには昔ながらの人情が残っています。

信州弁も本当に温かみがありますよね。

そうずら？ そうじゃんかい？

信州弁を使うのも、はあるかぶりだもんだで、うまく話せないんだに！
ほいだもんで、今日の話も東京弁になっちゃうけど、ちったあ我慢してきいておくん。いいずらか？

最初に、若干の自己紹介をさせていただきます。

生まれは昭和 16 年。先月 64 歳になったばかりです。中学時代はイガクリ頭。高校時代は髪もふさふさの美少年でした。

あれから 50 年 。

昔は目の前が明るかった。今、明るいのはこの頭だけ・・・。

出身は箕輪町。伊那北高校から早稲田大学に進み、卒業後は、NHK 学園高校の教師として簿記会計を教えていました。これはNHKの教育テレビとラジオの放送講座をもとにした通信制の高校で、当時は全国に1万人ほどの生徒がおり、長野県にも大勢おりました。現在は生涯学習としてのカルチャースクール的なものも増えてきているようですね。

この後、聖教新聞社に入社、海外特派員として10年間、パナマを拠点に、北中南米とヨーロッパを取材で回っておりました。

そして4年前に定年退職。定年1年目は横田基地の中にあるセントラル・テキサス・カレッジで英語の再勉強。2年目には南スペインのマラガ大学に1年間留学し、スペイン語とスペイン文化の勉強をしました。

スペインでの生活は非常に新鮮で刺激的で、熟年の自分たちにもいろんな吸収するものがあります。これは是非、日本の皆さんにも伝えるべきだ、なんて考えが生じてきて、それらをまとめ、「定年留学してみませんか？ 60歳からのアクティブ・ライフのすゝめ」といった本を出版した次第です。

幸いにも、本は、図書館流通センターの図書として選定され、その新刊案内にも紹介されております。

現在は、地元昭島のシルバー人材センターで自転車整理の仕事、また、インターネットに載せる都立高校の「国際理解」をテーマにした教材づくりや英検受験者の指導、また立川のNPOで通訳や法律相談など、在日外国人の支援活動をしております。

また、来月からはSGIで外国人メンバーの相談室の担当もさせていただきます。

つい先日のスペシャルオリックスでは、スペイン語の通訳としてボランティアで郷里の箕輪町に行ってきたところです。

さてきょうは、特派員の活動、また聖教新聞が海外でどのように読まれているのかと、その取材活動にまつわるエピソードのいくつかをご紹介します、併せて、文化や伝統の違いのなかで、どのように日蓮大聖人の仏法が各国に広まっているか、についてお話しさせていただきたいと思っております。

きょうは愛読者大会ということで、最初に、いつも聖教新聞の購読推進にあたりましては、多大なご尽力をいただきありがとうございますこと、元聖教の職員の一人として心より感謝を申し上げます。本当にありがとうございます。

さて、本日の私の話のタイトルは「地球を結ぶ SEIKYO SHIMBUN」とさせていただきます。聖教新聞が地球の隅々でも読まれ、日蓮大聖人の仏法が、また、池田 S G I 会長の思想が世界的に広がっているからです。

今、海外広布の草創の時代と現在を比べてみますと、聖教新聞の読まれ方、また、原稿の送り方の変化に隔世の感がいたします。

昔、海外広布の草創期の頃　今から 30 年から 40 年前　AIRMAIL（航空便）ですと 1 週間から 10 日、船便ですと 1 カ月以上遅れて届く聖教新聞や大白蓮華を、ニューヨークの街角で、あるいはアマゾン・ジャングルの開拓地で、信心の唯一の源泉としてボロボロになるまで回し読みしたものでした。

今、OCS や DHL など（国内の黒猫ヤマト、ペリカン便、カンガルー宅急便のようなもの・・・不思議に動物の名前がついているのも面白いですね）、海外郵送システムの発達により、地球上のほとんどのところで、聖教新聞が数日の内に読めるようになりました。

香港ではその日の夕方、ロサンゼルスでも時差の関係で（17 時間遅れ）、その日の夕方、同じ日付の聖教新聞を読むことができます。ただし、郵送料等の関係で、値段はぐっと高くなってまいります。

例えば、OCS（海外新聞普及会社）で聖教新聞一部を購読の場合、一カ月の購読代金が（どれも外貨と円の交換レートに変動があるためおおよその金額ですが）：

ロサンゼルスで　約 9 0 0 0 円

ロンドンで	約 1 0 0 0 0 円	
パナマで	約 1 2 0 0 0 円	
スペインで	約 1 3 0 0 0 円	となっております。

どこも日本の 1880 円のほぼ 5 倍から 7 倍にあたります。それでも、先生の指導の載る聖教新聞は一刻も早く読みたいと、日系企業の駐在員や日本人学校の先生など、現地で頑張っている日本人メンバーが購読しております。

現地のメンバーは、現地の言語で発行された機関誌を購読しているわけですが、聖教新聞がその機関誌編集の大きなニュース源、信心指導記事の源泉にもなっているわけです。

同様に、海外から本社に原稿を送る段取りでも大変な変化が起こっています。今は、日常生活でも、文字を相手方に送るのには F A X やメールが当たり前になっていますが、私がパナマに赴任した当時は、F A X はまだありませんでした。体験談のように急がない原稿は航空便で、ニュース性の急ぎの原稿は、電話で送ったものでした。

書いた原稿を電話口で読み上げます。それを、本社の担当記者が、原稿が短ければそのまま書き留め、長ければテープに録音し、それを再生するわけです。これは大変な時間を要する作業です。

そして、今でこそ慣れましたが、最初は電話口での最初のあいさつにとまどったものでした。

時差の問題です。

例えば、ブラジルで、すべての行事が終わって原稿をまとめ送るのは夜の 10 時頃。ところが日本では朝の 10 時です。(ブラジルは日本とちょうど 12 時間遅れの時差があります)。

こちらは「コンバンワ」。でも相手から戻ってくるあいさつは「オハ

ヨウゴザイマス」。

しかも、こちらは一日の仕事の疲れでブランデーなど寝酒の時間なのですが、相手はモーニングコーヒーで一番張り切っているときなんですね。

そう、ブラジルといえば、こんなエピソードもありました。国はちょうど日本の真反対にありますね。よくこの今いる所をどこまでも掘っていくとブラジルに出るなんていわれたもんです。

これをある時、ブラジル人と話をしている「日本の真裏のブラジル」と言ってしまう、ずいぶん反撥されたことがありました。

「何言ってるんだい。ブラジルから見れば日本こそ裏側じゃないかい」と。

たしかにその通りですネ。円い地球から見れば、どちらが表でどちらが裏かは決められないわけです。

ちなみに、南米で見る世界地図は日本のものとはかなり違ってきます。ちょっと皆さんも小学校時代に習った世界地図を思い出してみてください。地図の図法によっても違いますが、もっとも一般的なメルカトル図法では、日本が地図のほぼ真ん中にあり、その左側にアジア、ヨーロッパのユーラシア大陸、アフリカ大陸、右側に太平洋をはさんで北米大陸、南米大陸が描かれています。ブラジルなどは右下の端の方にある。

ところが、あちらの地図では、真ん中に北南米大陸が描かれています。ですから、日本の位置はというと、ずっと左上の端、日本の地図でいうイベリア半島、つまりスペインの端、世界の外れのような位置になるのです。彼らの言うことも分かるような気がしますよね。

ここでクイズをしてみましよう。

地球儀または世界地図の「赤道」から何が想像されるでしょうか

。

「地球上に引かれている赤い線」

「地球上の最も暑い点のつながり」

「地球の横腹を一周し北半球と南半球に二分する線」

「地心を通して自転軸に垂直な平面が地表に交わる大円」

3番、4番は一応、正しいといえるでしょう。でも2番は異論が出てきて、さらに1番ともなると論外ですね。

エクアドルに行った時（ペルーの隣りです）私はその「赤道標」といわれるものを訪れました。首都キト市の郊外へ車で小1時間。荒涼たる禿山のふもとやや広い台地に、基台の各辺が約8m、高さ15mほどの、先端に向かってやや細くなっていく四角柱が立っていました。その上に直径3mほどの地球儀がのっかっています。

四角柱の各面には、それぞれ[E][O][S][N]との文字が刻まれています。それぞれスペイン語で「東」「西」「南」「北」の頭文字なんですね。

[E](東)[O](西)面にあたるコンクリートの地面の真ん中には、幅10cmほどの1本の線が東西に伸びていました。これこそまさに「地球を南北に二分する」という“赤道”なのです。

でも冗談ながら、色は何もついていませんでした。赤色でもなく、地面の汚れと土ぼこりでそれは黒色に近くなっていました。私は先に友人から聞いていた指示を思い出し、その線を二本足でまたくと持っていたカメラを同行の友人に渡しポーズをとったんです。

友人は破顔一笑。「セニョール・シミズ、とうとう地球をまたぎましたネ」と。

この瞬間、私は地球の南北両半球に足をかけたことになるのだというんです。たいそうなユーモアですが、言われてみるとついそんな気になってしまうから面白いですねえ。

これも冗談ながら、またいだ両足も股も、熱さでヤケドをするよう

なことはありませんでした。

周囲の気温は暑さとは程遠く、摂氏 10 度前後で肌寒いほど。キトが
海拔 2800m の高地にあるからです。ところで、国名の「エクアドル」と
は、実はスペイン語で「赤道」の意なんですね。

この赤道の下半分、いや南半分の南半球では四季も反対になります。
日本は今桜から若葉のもえる季節。南米のブラジルやアルゼンチンで
は、これから枯葉の季節を迎えようとしているところですね。

話を新聞に戻しましょう。原稿を送るに当たってもう一つの問題は固
有名詞でした。新聞は正確さが生命です。そこで人名や地名など電話
で伝えるのにはそれぞれ工夫が必要となります。

例えば、ロペスという人の名前を正確に伝えるためには：

ロシアのロ

ペンギンのペ

スイスのス

と言って、そして「ロペス」と確認するわけです。

時間が遅くなり、疲れてくると、この表現ずっこけてくることもあり
ます。

例えば、カリブ海にバハマ諸島なんて小さな島があります。

先生がアメリカからキューバに行く際に立ち寄った島です。

まず「バハマ」と言ってから、また確認します。

バカジカラ

ハラヘッタ

マヌケ （分かった？ となるわけです）

今は F A X は当然として、パソコン通信の時代です。今、特派員が
「Eメール」等で送った原稿は、そのまま本社の大型コンピューター
に入り、モニターとして取り出すことができます。

ふだんは、それにデスクとしての手を加えて紙面にするわけですが、
もし、手を加えなくてよければ、特派員の送った記事が、ただちにそ

のまま紙面として組まれることも可能な時代なのです。

写真も同じです。かつては海外からの写真はほとんど航空便で送りました。急ぐ写真は、A PとかU P Iといった通信社と契約し、電送で送ってもらいました。やがて、特派員も自分で小型の電送機を持ち歩き、それで送るようになりましたが、今はまたデジカメとパソコンを使って、アフリカの奥地からも写真が東京に届くようになっていきます。

ヨン様ファンのおば様たちが、携帯メールで写真を送る時代ですよ。ね。

ところで、これだけ交通や通信の手段が発達しても、それぞれの国の人々の生き方や生活慣習はそんなに変わるものではありません。

新幹線が10分か15分おきに正確にピタリと発着する。都内の通勤電車も2～3分おきに入ってくる。少しでも遅れると皆イライラし出すという日本です。

幸い、私のいたパナマではそうした問題はありませんでした。それは電車がなかったからであります。近場は自動車かバスで、遠くへは飛行機が一般的でした。

そんな分、秒を争う時間正確な日本の競争社会から、何事においてもゆったりしたリズムのラテン・アメリカ（中南米）に赴任したばかり、私自身、ずいぶんイライラしたものでした。

向こうは何事も「アスタマニャーナ」でよいのです。これはスペイン語で「あしたまた」という意味ですが、5時になると、仕事が途中で、店にお客さんがいても「アスタマニャーナ」。約束の期限が守られなくても「アスタマニャーナ」。それよりも自分の生活を大切にしているんですね。

パナマでも、夜遅くまでオフィスに電気のついているのは、大部分

が日系の駐在企業でした。(もっとも、先ほど申し上げた時差の関係、ということもあり得ます。パナマと日本の時差は14時間。東京本社が昼間の時間に、上司と連絡を取るためには、向こうは夜の時間に電話をしなければならないわけです)。

社員のみならず役員も、官庁の局長クラスの幹部職員も、定時には殆ど帰ってしまっているのです。

私も、「これこれしかじかのことをいつまでに」との指示を日本から受け、一生懸命取り組むのですが、なにせ相手のあることです。はかどらない交渉と仕事にとうとう「五つの『あ』の原則」を編み上げました。

「あせらず」「あわてず」「あくせくせず」「あてにせず」そして「決してあきらめず」。

この「五つの『あ』の原則」を心にとどめている限り、それほどイライラすることもなくなってきたわけです。

ここで、世界でも働き者の日本人(働き蜂なんて悪口を言った外国人もいましたね)についてのいくつかの小話を紹介してみましょう。

ここでまた質問です。

「ある日、大洋を航海していた船が事故で沈没してしまいました。海に放り出された乗客は、遠くに見える島に向かって泳ぎだしました。その中のたった3人だけ、この小さな島に泳ぎ着くことができたのです。若い男2人と女1人でした。さて、皆さんに質問したいのですが、この男2人は女1人をめぐってどんな行動をとったのでしょうか」

<会場に質問?>

答えは次の通りです。

フランス人:1人は彼女の夫に、もう1人は彼女の愛人になりました。

イギリス人：なんと2人は、彼女を放っておいて、自分たち2人で
愛し合い始めたのです。

イタリア人：2人は彼女を自分が手に入れようと、決闘を始めたの
です。

では日本人はどうしたのでしょうか？

日本人：2人は、島のどこかに電話がないかとあわてて探しに出か
けました。本社に電話して、上司の指示を仰ごうとしたのです。

このジョーク、日本人の行動形態の特徴をよく表わしていると思
いますよね。

もう一つ、同じようなよく知られたタイタニックのジョークがあり
ます。多分、この会場にも知っていらっしゃる方もいると思いま
すが・・・。

<ジェスチャー大きく>

「いよいよ沈没しかけた船から、男も女も我先にと救命ポートへ避
難しようとした。大混乱になろうとしている現場で、婦女子を優先さ
せようとして船長が説得を試みます」

まずアメリカ人男性に：「キミはヒーローになりたくないか！」(解説)

イギリス人男性に：「あなたは真性のジェントルマンだ！」(＂)

ドイツ人男性には：「君の国の法律ではそうなっているよ」(＂)

そして日本人男性には：「皆がそうするからあなたもそうした方がい
い」

このように、日本人は、まず周りに合わせようとするんですね。周
囲の目を気にし、突出することを恐れ、横並びを好み、他人のするよ
うに自分もする、という傾向を持っている。日本人は、他人の目を気

にしすぎるように思いますね。

私はドン・キホーテの言葉が大好きですが、その中の一つにこういうのがあります。

「理想と正義に向かって突進するオレのことを、皆はおかしいと言う。でも、やりたいことがあるのに、世間の風評、体面なんかを気にして現実に妥協、やろうとしない彼らこそおかしいんじゃないのかね」

この言葉の後半部分は、日本人のメンタリティー、傾向性をも表わしていると思います。

もう一つ、今度はよい意味での小話ですが.....

「アメリカでは金曜日または月曜日にできた車は買うな」というジョークがあります。

自動車工場で車のボルトを締めかけても、金曜日に終業のベルが鳴ると、途中でも帰ってしまう。月曜日は、土、日曜日にめいっぱい遊んだ後なので、ボルト締めにも力が入らない。しかも、昼休みのベルでも、途中ですぐに手を離し、職場から離れてしまう。だから、ボルトの1本ない、あるいは締めかけの欠陥車や故障車が多い。その結果、日本の車が売れて、結果的に貿易摩擦を作る原因になっているというものです。(トヨタ、ホンダ、ニッサン等の人気)

やや極端なジョークですが、国民性の違いの本質についていると思いますね。

ジョーク、小話はこのくらいにして、今度は私が実際に体験したエピソードです。

その一つは人種の混交です。

よく、ニューヨークは“人種の坩堝(るつぼ)”と言われていますが、パナマ市も同じでした。ある時、日本でのSGI研修会に参加したメンバーが帰国するなり言ってきました。

「S rシミズ (Mrシミズ) 日本での研修会は素晴らしかった。池田先生にもお会いできたし、あの新幹線にも乗ることができた。日本の学会員の皆さんは本当に親切で感激した。充実した日本滞在だった。でも、とても驚いたことが一つあったんですよ。それは、日本に行ったら日本人だらけですね」と。

先住民のインディオと、新大陸の発見以来、ヨーロッパからやってきた白人、それに運河の建設時に労働者として入った黒人や中国人。その子孫。そしてその混血。またその混血……。極端な言い方をすれば、100人集まれば、100人の肌の色が違うパナマからすれば、彼の発言もうなづけるような気がします。

もっとも、日本も近年は、いろんな国の人々が東京にもまた地方にも住むようになり、状況は少しずつ変わってはおりますね…。

でもこうした生活慣習や伝統の違う海外の人々も、宗教の問題になると本当に真摯に考えております。よく日本では、「宗教なんて年寄りのすること」「自分は信念と努力でいくから宗教は必要ない」とか、あるいは、宗教のないのが却って知識人みたいな錯覚がありますが、これはとんでもないことです。

海外では「宗教を持たないのは野蛮人」ととらえられています。「無宗教の人は信用できない」あるいは「宗教のない人というのは、精神的な障害者か、または共産主義者か」ととらえられる向きもあります。

よく飛行機で外国に行くと、国によってはビザ (入国許可証) の申請書か、入国カードに本人の宗教名を記入する欄があることがあります。そんなとき、あわてて「仏教」なんて書き込んだりする。それが、実は、キリスト教の教会で結婚式を挙げてきたばかりの新婚のカップルだったりするんですよ。

でもどうせいいんですよ。「生まれたときは神道でお宮参り、結婚式

は教会で、そして葬式はナミアムダブツの念仏なんかに戻るんですから」

「カッコイイと 座禅のキミが言ったから ミコの私も教会結婚」

字余りで、あの一世を風靡した詩集「サラダ記念日」やチョコレート語訳という「乱れ髪」の俵万智さんほどにはさえない句ですが、私も短歌しちゃってみたんですね。

俵万智さんは、「サラダ記念日」の代表作で「この味がいいねと君が言ったから 7月6日はサラダ記念日」と詠みました。私はこれをもじって、ふだんは無宗教でも、また禅宗や神道をやっている、いざ結婚となると、そこはかたない西欧風へのあこがれ、かっこ良さにひかれて、教会結婚に進む二人の愛を詠んだわけです。

このように、冠婚葬祭の時だけ、宗教が出てくるのが残念ながら日本人の一般的傾向です。それも教えの正邪、高低も知らず、その上、仏教もキリスト教もごちゃ混ぜにしている。こうした、宗教の重要性、本質の理解が浅い日本の土壌の中で、創価学会の存在、またそれを理念的にリードする聖教新聞の使命はますます重要になってきていると実感しています。

私たちの立場から言えば、時代にあった、正しい最高の宗教が、日蓮大聖人の仏法であり、具体的には、その在家の団体である創価学会の会員として、信仰の実践、活動に参加していくことにあるわけです。

カトリックが90%以上の中南米でも、この仏法をたもったメンバーが各国に増えています。1492年、コロンブスが新大陸に到着以来、500年間にわたって広まってきたキリスト教の土壌に、この約40年の間に、日蓮大聖人の仏法が広まり、今、北南米のすべての国に仏教徒が誕生、SGIのメンバーとして活動しております。彼らが、なぜ東洋の仏教を求めるのか。

いろいろありますが、その一つは「三証」から見ることができます。文証、理証、現証、という三つの証拠。つまり教えを書かれたものがあるか（文証）、教義が道理に合い矛盾していないか（理証）、そしてその宗教を实践した結果、現実に生活が変わっていくか（現証）、といったものです。

文証で言えば、私どもの御書に対して、向こうではバイブル、聖書があります。

理証について言えば、大聖人の仏法は、因果の法則、生命の永遠、を根本に説かれており、矛盾はありません。キリスト教では、その根本は「天地創造説」です。つまり「神がこの世を作った」との教えが原点になっています。したがって、例えば、自分が今、何か問題を抱え、不幸なもの“神がそう望むからやむを得ない”“神の思し召しだから”と、念仏にも似たあきらめの生き方になってしまうのです。

歴史的にも「地球は動く」といった天文学者のコペルニクスやガリレオを弾圧してきた経過もあります。天動説、つまり天にいる「神」が中心でなければ困るわけです。

このように科学と相容れない部分があるのが問題です。生物学や天文学の発達がキリスト教の矛盾を表したのに対し、科学が発達すればするほど、仏法の教義の正しさが証明されていくでしょう。

そして**現証**について言えば、仏法を实践した信仰体験は、ここにいらっしゃる皆さんのお一人お一人がつかんでいるものです。キリスト教でもミラクル、いわゆる奇跡を語っています。私もすべては否定しませんが、それがすべての信者に同じような結果は出ません。

これらを詳しくお話する時間もないので略しますが、以上のような理由から、彼らは仏教がキリスト教に比べて優れていると分かって入信してくるのです。

それと、彼らの良いところは、見栄とか体裁、外聞を気にせず、良

いものはよいと素直に認め、自ら実践することです。日本人ですと、良いと分かって、どうしても自分の意志よりも、周囲の目を気にして、なかなか踏み切れない、とって面があるようなんですね。

ここにも「なるほど、良さそうだ。自分もやってみようか」と思っている方がいらっしやると思います。その一方で、「果たして両親がどう反応するか」「友達がなんて言うか」「拝むなんて恥ずかしい」と、周りを気にして信心に踏み切れない方がいらっしやるかも知りません。そこで大切なのは、良いものは良いと見る目と、自分の意志を大切にする事、そして勇気だと思います。

その点、「個人主義」と言われるヨーロッパや中南米の人々は、良いと思ったことは、周囲の反応を気にすることなく、自分の意志で実践を始めるのですね。

私たちの唱えている南無妙法蓮華経は、宇宙のリズム・法則であり、私たちの生命のリズム、法則なのです。わかりやすく言えば、ニュートンが発見した万有引力の法則と同じように、この生命の法則は、宇宙に厳然とある法なのです。

3000年前、インドに生まれたお釈迦様は、50年かかって膨大な量の教えと経典を残されました。その中で、最後の8年に説かれた法華経が最高の教えといわれておりますが、実はその法華経の究極中の究極が南無妙法蓮華経なんですね。

これを、更に現代的解釈で見ますと

20世紀最大の歴史学者といわれるイギリスのトインビー博士は、池田SGI会長との対談の中で、「人間の幸・不幸は、この宇宙の究極の存在とどう関係するかによって決まる」と言っています。

博士は、仏教徒ではなかったのですが、その究極の存在が何であるかを明言するところまではいきませんでした。が、仏法の目から見れば、その究極の存在こそ、南無妙法蓮華経を指しているのではないかと思

ます。

南無妙法蓮華經を唱え、小宇宙である人間の生命が、大宇宙のリズムと合致することによって、物事が順調に進み、願いもかなっていくわけです。信仰をした人が、自身を変革し、体験をつかんでいくのも、この原理にのっとっている、とすることもできます。

今や、S G Iのメンバーは、ラテン・アメリカのみならず、ヨーロッパでも、アジアでも、アフリカでも、ロシアでも、社会主義の国キューバでも、世界180カ国以上の国々で活躍しております。

最初に述べましたように、白い肌の人、黒い肌の人、褐色の肌の人、

そして、英語の人、スペイン語の人、フランス語の人、中国語の人、韓国語の人、すべて同じ南無妙法蓮華經を唱え、「妙法蓮華經方便品第二」で始まるお経を読んでおります。

一方、S G Iは、国連の非政府機関NGOの一つの団体として、反戦、反核、難民救援などの支援活動が高く評価されています。

そして、各国の州や市がS G IまたS G I会長を顕彰、代々の創価学会会長の名前を道路や公園につけたり、市議会が「S G Iの日」を設定したり、その社会貢献の活動を称えています。

今、世界から問われているのは、すべてに経済のみを優先してきた日本なんですね。**お金が宗教**になってしまっている。国ばかりでなく、社会も個人もそうした時流に流されてきました。

モラルの低下。そして子どもたちからさえも、豊かな心の情操は消え、ナイフによる殺人事件などの社会問題を引き起こしていることです。

バブルがはじけて、次の指針を社会が模索しています。行きづまりの日本を根本から立て直すのは政治でもない。経済でもない。教育です。人間をやることです。問題の根源は、日本人の精神の貧弱化、貧

困化にあります。

お金がたくさんあるから充実した生活を送れるのではない。正しい思想、宗教を持ち、心が豊かで生きる智慧があつてこそ、本当に充実した楽しい生活を送ることができるわけです。

ある海外のマスコミが皮肉っています。

「日本では経済不況、経済不況とって、今も日本中が騒いでいる。あんなに高い生活水準なのに、ちょっと悪くなったからとって、あたふたとしている。それは、いまだに幸せの拠りどころをお金に求めているからだ。金満生活の薄っぺらな幸せを求めているからだ」

辛らつな批評ですが、残念ながら一部の実態を突いているとも思います。

小説「ドン・キホーテ」のなかで、ドン・キホーテの従者サンチョ・パンサが言っています。

< 声音で >

「人間、寝てえるうちは、身分の高え者も低い者も、貧乏人も金持ちも、みんな同じでさ」

「この世を捨てて、地の下へもぐる段になったら、お大名も日雇いも、おんなじように窮屈な途を歩くだし、法王様のからだも聖器番のからだも、よしんば背たけにちがいはあろうと、占める広さに変わりはねえ」

そう、誰でも寝るときは、あるいは死ぬときは、どんなに頑張ってみても、たたみ2畳以上を独占することは出来ないですね。

今度はここで、私に関係したSGI（創価学会インタナショナル）

の一部分でもある、国内の外国人メンバーの状況をお話してみましよう。

その一つは、東京福生市の米軍横田基地にある学会の組織「サンタメリカ支部」です。

『サンタメリカ』という名前は、“三多摩のアメリカ”という意味です。

1支部1地区3ブロック、50世帯、約100人と、メンバーは少ないですが、40年以上の長い歴史の中で、一時、たとえばベトナム戦争のころは、250世帯、500人を超えたときもあったといえます。

メンバーの構成は、主に基地で働くアメリカ人とその家族です。

もう10年程前ですが、そんな特殊な組織の支部長に私が任命されたのです。英語が出来、住まいが隣の昭島市で基地に近いことが理由でした。

そして、ちょうど5年前、サンタメリカは、仏教団体・創価学会の支部の一つとして、横田基地の中に正式に登録されました。

この登録によって、創価学会はキリスト教やユダヤ教とまったく同等に扱われることになり、私たちにとって大変な前進を意味しました。次のような特典が与えられることになったのです。

- ◇ チャペル(教会)の施設を、いつでも会合などに使用できること。
- ◇ 病院や図書館など公共の施設に、仏教またSGIの書物やパンフレットを置くことが出来ること。
- ◇ 基地で発行している新聞や基地内のテレビに必要なお知らせを載せられること。
- ◇ 遠くでの行事に、空軍のバスが無料で提供されること。

日本ではちょっと考えられない扱いですが、これは、どの宗教も公平に扱う、また宗教そのものを大切にする民主的なアメリカの風土、

機構からくるものと思います。

私の支部長当時、この空軍のバス提供による本部見学会を開催しました。小児科医で空軍の少佐でもある地区部長が、車両部隊に行事計画とバス依頼申請書を提出すると、20人乗りのバス3台がOKとなりました。

中央道から首都高速へ。途中の料金所の通過が自分にとってはまた驚きでした。車はどれも左ハンドル。私が先頭車の右側の助手席に座りました。料金所で車両部隊から受け取った10センチ四方ほどのチケットを渡すと、料金所の係りの人はごく当然のように「どうぞ」と。こうして3台、往復計4つの料金所ともパスしたのです。

基地が認めた公式活動。しかもガソリン代、高速道路料金も含めて、費用は、いわばアメリカ政府もち、とも言えます。歴史的な初の試み、新たな展開でした。

二つ目の話題です。この本部見学の際、本部より仏教関係の書籍を多数いただき、横田に持ち帰りました。

翌日、それを基地の図書館に持参しました。図書館の責任者は持参した20冊あまりの本の中から、7冊を選びました。

The Writings of Nichiren Daishonin 英訳の御書

The Lotus Sutra 法華経

Choose life トインビー対談

Women against War 女性の反戦出版

等、それぞれ、日蓮大聖人の仏法、またSGIの紹介に最適の本です。これは間もなく図書館に並びました。

三番目は教会、チャペルです。基地のゲートを入れてすぐのところ、広い駐車場を持った明るい感じの教会があります。

教会には400人ほどを収容する本堂のほか、10人から100人余を収容可能な大小六つの部屋があり、どんなイベントに使っても良いと言います。本堂には、少し高いステージと、本尊を安置できる場所がありますが、ここにはキリストの像も十字架もありません。

10年ほど前から、特定の宗教の本尊を置くのは禁止されることになった。「ユダヤ教でもイスラム教でも、仏教でも必要であれば、その行事のときに本尊を安置して結構です」と。つまり、すべての宗教に公平、中立なのです。

牧師は学会が日本で最大の宗教団体なのに、どうしてこれまで申請に来ないのかと思っていたといいます。更に、学会が本山と手を切ったことも知っており、「そんなことは全然問題じゃない、キリスト教だって分裂に分裂を重ねてきている。時には、教義のために殺し合ってきた歴史だってあるんだから」とまでいうわけです。

私たちは、チャペルを使って支部の協議会を行いました。館内は暖房が良く効いており、とても使いやすい。本堂の祭壇、つまりステージでは、ときおり、若者たちがゴスペルならぬロックに近い曲の演奏練習をしています。会場は、学校の行事にも使われることもあり、まったくオープンなのです。私たちも教会入り口に、こちらSGIのパンフレットも置いてきました。

話題の4は、記念行事への参加です。

横田基地の将校クラブで行われた National Prayer Luncheon に、サンタメロカ支部より15人の代表が参加、400人の列席者の前で「21世紀のマーチ」を合唱しました。

この行事は、世界各地の米軍基地およびアメリカ本土のいくつかの州都で、毎年2月に行われている公式行事で、各宗教が参加、ゲストスピーカーの講演を中心に、各宗派の代表が数分間のスピーチをするものです。

これは、宗教の多様性の中で、国家の基盤となる精神的価値を高めたいこうとするもの、とのことです。

昼食会は、国旗の入場から、日米両国の国家斉唱に始まり、各宗派からの短いスピーチ、コーラス、ゲストスピーカーの講演、司令官(横田基地のトップ)の話等で、格式も高く厳かに行われました。

出席していた宗派は、プロテスタント、カトリック、イスラム、ユダヤ、モルモン、バハイ、それに「仏教グループ・創価学会」としてのサンタメリカです。

他のすべての宗派が、数分の言葉(教義)を述べていたなかで、サンタメリカは、シウ地区部長が「平和ほど尊きものはない……」との、「新・人間革命」の最初の一節を紹介した後、みんなで「21世紀のマーチ」を合唱しました。それは他のグループに比べて、ひときわ明るく躍動していたとの評判でした。

更に、当日のプログラムの裏面には、担当牧師の手配で『21世紀のマーチ』の歌詞が印刷され、会場からはこちらの合唱に合わせて、調子を取るような光景も見られました。

そのほか、小学校の図書館を借りての仏教セミナーの開催。基地の大型バスで、基地の中の学校の先生、生徒等、多数のゲストと一緒に、富士美術館や創価大学の見学会もしております。

ともあれ、横田基地は沖縄も含めた、日本にあるアメリカの基地のすべてを統括する中心です。3400メートルの滑走路と、福生市、立川市等、6市町村にわたる広大な敷地を有し、在住のアメリカ人8000人。都知事より空港の民間との共用を提案されてもいる、焦点の地でもあります。

そこになんとか広布のモデル、その土壌を築いていきたいというのが、メンバーの願いであり、祈りなんです。

いろいろと話してまいりましたが、最後は、つい先日、長野で行われたスペシャルオリンピックの時のことです。テレビや新聞でも取り上げられました。開催地の長野県の皆様は私よりもスペシャルオリンピックについて詳しいでしょう。

でも全国的に言ったら、パラリンピックは知っていても、スペシャルオリンピックというのは、日本ではまだ余り知られておりません。パラリンピックが身体障害者を対象としているのに対し、スペシャルオリンピックは、知的障害者を対象としたオリンピック。日本では初めてで、アジアでの開催も初めてでした。

82カ国から約2000人の選手と約10000人のボランティアが長野県に集いました。そして本番の大会前には、全員がホストタウンとなった各市町村に交流で入ったのです。

私の出身の箕輪町にはペルーの選手17人がやってきました。南隣の伊那市にはスペインから、その北隣の辰野町にはアゼルバイジャンの国からでした。ペルーの言葉はスペイン語です。田舎には英語は出来る人はいても、スペイン語となるとなかなかありません。そこで、町の役場から、ボランティアで通訳に来てくれないか、との依頼があったのです。

地域のためには何でも役に立っていこう、というのが創価学会です。私も一つ返事で東京から伊那谷の箕輪町に飛んでいきました。

現地での町の人々、とりわけ同じ状況にある障害者や小学生との交流はとても感動的でした。かつての仕事柄、私はSGIメンバーと日本の学会員の交流現場で役員や取材をしてきて、その感動の場面は何回も見てきておりました。

こちらは信心をしていない人々の間での交流でしたが、お互いにハンデに負けず、いかに前向きに生きていこうとしているか、人生に挑戦しようとしているか、といった姿勢がぶつかり合って、また、小学

生たちのけがれの無い純真な歓迎の姿が、これはまた別の面で非常に感動的だったのです。

そこで、東京に帰ってから、町の「みのわ新聞」に3回にわたって感想を送ったのです。それはすぐに3月2日、3日、5日付けに掲載され反響を呼んだようでした。

一方、交流で訪ねた小学校は、なんと私が半世紀前に卒業した小学校でした。ここでの子供たちの準備や心のこもった歓迎も印象的だったので、東京に帰ってから生徒全員にということで、校長先生宛に御礼と感想の手紙を出しました。そこには、子供たちへの感謝と、これを機縁に将来、ペルーにまた海外に行けるような人材に育てて欲しい、といった先輩としての期待と激励の言葉を綴ったのです。

そしたら、今度は同じ「みのわ新聞」の1面で、私の手紙に児童たちが感動して、全員が御礼と感想文を書いて私宛に送ることにした、といった記事が載ったのです。

小林校長は「小学校時代に、将来の夢を考えることは、児童にとって大切な経験になる。清水さんからの手紙を『学校だより』で、全学年の家庭に紹介、親子で考えてもれれば」と話している　と結んでいました。

私の手紙はこんな内容でした。

東小学校の皆さん、スペシャルオリンピックスのペルー選手団のかんげい、ほんとうにありがとう。私はあの時、つうやくをしていた清水武(しみず たけし)です。頭のはげたおじさんです、といえは思っ出してくれるでしょうか。

あの時、つうやくをしながら感じたこと、またホテルに帰ってからペルーの皆さんが語っていたことをふくめた、私のかんそうをつたえさせてください。

まず、かんげい会のだいせいこうよかったですね。ほんとうにおめでとう。さいごにペルーチームのかんとくさんが、かんげきして、な

みだをこらえながらかんそうを語っていましたね。またそれをつうやくする人も、かんどうで言葉がつまっていました。それは、東小学校の皆さんのまごころがペルーの皆さんの心にとどいたからです。

きっと皆さんは、ペルーのチームをむかえるために、いろんなじゅんぴをしてきたことでしょう。たいへんな時もあったでしょう。たいこのれんしゅう、おみやげのじゅんぴ、こうしゃをおそうじをすること、そしてスペイン語のれんしゅう……。

とくに皆さんがペルーの国歌をスペイン語でうたった時は、私もジョンときてしまいました。ペルーの皆さんが、どれほどかんどうしていたかは、皆さんも見ていてわかったでしょう。

かんとくさんもあいさつで言っていましたね。

「ちきゅうのはんたいがわの国から来て、まさか自分たちの国の国歌をきかせてもらえるとは思いませんでした。それも、小学生の皆さんが、それも、ペルーの小学生よりもじょうずなスペイン語で！」って。

この時、かんとくさんは、皆さんのどりよくに、かんどうしてむねがつまってしまったんです。まごころは人の心にとどきます。そして皆さんがしてくれた、かげのじゅんぴや、くろうは、かんとくのようなたちばにある人にはわかるのです。

東小に行く日のごぜんちゅうは、箕輪町の体育館でフロアーホッケーのれんしゅうをしました。あのかんとくさんは、たいそうの先生です。ふだんはやさしいようですが、れんしゅうの時は選手にとてもきびしいのを見してきました。しょうがいのあるあの選手たちに、じゅんぴ運動で、うでたてふせを20回も30回もさせ、体育館をジグザグこうしんや、たんきよりをぜんりよくで走らせていました。そして少しでも手をぬいている選手には、「もっとしっかり動け！」「もっと力をいれろ！」って大きな声でしかりつけるのです。

選手たちもひっしです。はをくいしばって、ちょうせんしているしょうがいしゃもいました。だからこそ、ふじゆうな体でも、あんなじ

ょうずなプレーができるんでしょう。

しょうがいをもつ人の、たいへんさをわかった上で、選手を一人でも生きていける人間としてそだてようとしている、かんとくやコーチだからこそ、皆さんがしてきたじゅんぴや、かげのどりよくがわかったのです。

とくに5年生の皆さんは、ほんとうによくやりましたね。校長先生のどじょうすくいのおどりもおもしろく、ホテルに帰ったあとも皆さんのひょうばんでした。

ところで、おじさんは今から半世紀まえ、ちょうど52年まえに皆さんと同じ東小をそつぎょうしました。とうじはまだ村だったので、東箕輪小学校といっていました。こうしゃも、もくぞうのポロポロで、教室のまどガラスも、われたままになっていました。でも、みんなは勉強もスポーツもねっしんでした。

学芸会の時のことでした。6年生だった私たちは「ドン・キホーテ」のげきをしました。その時、私がドン・キホーテのあいて役のサンチヨ・パンサをしたのです。りそうをかかげたドン・キホーテが、大きなふうしゃを、悪のきょじんとまちがえて、そのたいじのために、やりをもってとっしんした、というとてもゆうめいな話です。

作者はスペインのセルバンテスで、物語は長いけれど、とってもおもしろいですよ。このことがきっかけとなって、私はおとなになってから、こんどはスペイン語で読む勉強もしました。そして、定年になった2年まえには、スペインの大学に入り勉強、ドン・キホーテの物語のぶたいもたずねてきました。だから、イギリス人やドイツ人などの大学のクラスのなかまが、そんな私を「東京のドン・キホーテ」ってよんだんですよ。

こんなふうにして、私はスペイン語ができるようになったのです。そして定年のまえには、新聞のとくはいんという仕事で、世界中をまわってきました。

スペイン語はペルーだけでなく、世界の23カ国で使われている言

葉です。ペルーのアミーゴ（お友だち）との出会いをきっかけに、皆さんはどうかスペイン語でも英語でも、好きな外国語でいいから、しょうらい、いっしょうけんめい勉強してください。そして、いつかこんどは、皆さんがペルーに行けるようになってください。

東小の皆さんはほんとうにすごい、すばらしい！

世界をぶたいにしてかつやくするような皆さんがいっぱい出てくるのを、せんぱいのおじさんはきたいしています。

さいごにもう一度、おれいをいいます。

皆さんのまごころのかんげい、ほんとうにありがとう。

2005年2月28日

清水 武

東小の皆さんへ

在校生約 200 人のちいさな小学校ですが、こんな形で、生まれ育った郷里に幾分でも貢献できて、嬉しく思った次第です。

そして、私が現在住んでいる昭島市でも同じような波動が広がっています。近くの中学校で卒業前の3年生全員を対象に「国際理解」について講演、1時間の話の最後に、このスペシャルオリンピックの話を紹介したのです。

ここでも 170 人の生徒全員が感動して感想文を書いてくれました。なかには質問がいくつもあったので、私はまたそれに対して丁寧な返事を書いてあげたのです。そしたら卒業式では、校長先生がやはり私の講演からスペシャルオリンピックの話にも触れていました。

こうして将来を担う子供たちに、世界的な教育者でもある池田先生
の思想を伝えていけるのは素晴らしいことだと思っています。また、

こうしたことが自然に出来る自分に鍛えてくれた創価学会に心から感謝している次第です。

実は、このときの模様は3月3日付けの聖教新聞の「名字の言」で紹介されました。その後、いろいろと反響がありました。その一つは、記事を読んだ千葉県の読者が感動して、「是非ペルーの選手たちに竹細工100組を贈呈したい」と申し出てきたのです。

この方は学会員ではありませんでした。近所の学会員から新聞の啓蒙をされて読んでいた外部の方でした。そしてやはり障害を持っている方でしたが、その生き方がとても前向きで、地域では名士ということでした。

こうして、聖教新聞は国内の学会員はもとより、信心していない外部の方、また言葉の壁を越え、世界の信心していない人々の心も結んでいるわけです。

話は地球の反対側までおよび、内容もあっちこっちに飛び、間口を広げすぎたような感じで恐縮です。それぞれ皆様の話の受け取られ方は違うと思いますが、私なりにまとめてみますと：

1. 世界にはいろんな考え方、生き方があること
2. 日本と日本人が世界からどのように見られているか
3. 世界がどれほど宗教というものを大切にしているか
4. なぜ日蓮大聖人の仏法が正しいのか、なぜ人間にとって宗教が必要なのか
5. 聖教新聞がどんな形で地球の市民の心を結びつけているか

などをお話してきたつもりです。この中のどれか1点でもご参考になるところがあれば、こんな嬉しいことはございません。

またジョークやエピソードは、何かの機会の笑い話にでも使っていたら、これはこれで嬉しいですねえ。

最初、あの中年女性のアイドル、綾小路・キマロさんを真似ようとしたのですが、なかなかうまくいきません。話をする人は、聴衆に笑っていただけることが、最高の喜びなんです。でも、ここ松本の皆様は、そんな私の拙い話にも惜しみない笑い拍手を送ってください、もう感謝、感謝です。

やっぱり生まれ故郷、信州はいいですねえ。美しい自然と温かな人情。信州は、いつまでたっても、世界のどこに行っても私の心の原点であり、故郷です。

いつか、再びこの素晴らしい信州に戻ってきて、素晴らしい皆様と、地域のために少しでもお役に立てればと思っている次第でございます。その時は、どうぞよろしくお願い申し上げます。

長時間の御静聴、本当にありがとうございました。